

[総説]

学校支援ボランティアの意義を考える

～千葉県木更津市を例に～

多田元樹*

Key words : 学校支援ボランティア, 学校と地域の連携, 共生, 敬意, 感謝

はじめに

淑徳大学においては建学の精神に基づく「共生論」が各キャンパス共通のシラバスで開講されている。このこともあって学修の一環としてボランティアに取り組む学生は多く、活動を支援する学内の体制や組織も充実している。フィールドは多岐にわたり、なかでも地域の学校は学生にとって身近な存在であることから関心も高く、そこでの活動成果には広く期待が寄せられている。

学校ボランティアや学校支援ボランティアなどと呼ばれる活動（以下「学校支援ボランティア」と言う。）には様々なものがある。代表的なものは、地域住民による子どもの見守り活動（登下校時の安全ボランティア、スクール・ガード）、図書室などを利用して行われる読み聞かせ活動、学生による運動会や水泳指導のサポートなどである。

このような学校支援ボランティアが、学校単独ではなく国や地方自治体の取組として施策に盛り込まれるようになったのは平成10年頃からである。導入から20年以上経ち、市民活動の一環としても定着してきた学校支援ボランティアについて、改めてその意義を考えてみたい。

本稿で取り上げる千葉県木更津市は全国に先駆け学校支援ボランティアを制度化し現在も事業を展開している。筆者はかつて同市教育委員会に勤務しその制度設計に携わった者の一人である。このたび縁あって本学教員となり授業を受け持つ機会に恵まれた。シラバス（「チームワークとリーダーシップ」）を作成する中で、「他者に生かされ、他者を生かし、共に生きる」という建学の精神は、本学における社会福祉の教育のみならず木更津市の学校支援ボランティア活動事業にも通じるものがあるのではないかと思うに至った。

建学の精神にある「共生（他者と共に生きる）」には人々に感謝の気持ちを持つという思想が込められている。学校支援ボランティアも感謝の気持ちなくしては成り立たず、これこそ根本的意義なのだが、筆者には事業の創設期においてそこまで深く考えが及ばなかった。ここで改めて

* 淑徳大学総合福祉学部客員教授

学校支援ボランティアの意義を問うことによって、今後の同事業の発展に資するとともに、「共生論」を展開する本学教員にとって、地域の小・中学校で展開される学生ボランティア活動の支援や助言に少しでも役立てばと考え本稿を取りまとめた。

I 制度の概要

本事業は平成10年度に制度としてスタートし令和2年度で23年目を迎える。この間、多少の変更はあったものの事業の根幹が大きく変わることはなく、現在も木更津市内30校余りの全小・中学校において活動は展開されている。概要は以下の1～4に示すとおりである。開始当初、学校に通学していた子どもが成人し、母校で学校支援ボランティアとして活動する例もあると聞く。

1. 趣旨

本事業は木更津市の教育を支える「家庭、地域社会、学校・行政によるトライアングル子育て運動」を推進する事業の一つとして「家庭・地域社会との協働」を目指している。専門性がなくても「学校を支援したい」という思いがあれば、誰でも活動できるという点でいわゆる「社会人活用」とは趣を異にしている。具体的なねらいは次の3つである。

(1) 学校と家庭・地域の連携の強化

地域の教育力を学校へ導入することにより、「多様な特色ある教育活動の展開」と「開かれた学校づくり」を推進する。

(2) 地域内での連携の強化

学校支援ボランティア活動を共に行うことで、保護者・住民の連携を強化し、地域全体で「子どもたちの健全育成を推進する」という意識を啓発する。

(3) 子どもたちの規範意識の向上

ボランティア活動に取り組む大人たちに触れ、自らもボランティア活動に取り組むことにより、子どもたちの規範意識の向上を図る。

2. 活動内容

(1) 環境整備支援

・花壇整備、校庭整備（除草）、生け花、図書整備、小破修理、トイレ清掃等

(2) 教育活動支援

・読み聞かせ、外国語活動、家庭科・音楽科・書写・茶華道・武道・部活動指導補助等

(3) 安全支援

・安全・防犯パトロール、登下校の見守り・引率、プール・向寒マラソン安全巡視等

(4) その他

- ・児童生徒が行うボランティア、HP作成・管理等

3. 推進方法

(1) 募集及び登録

- ・教育委員会、学校、公民館のいずれかで、申請書に必要事項を記入の上、登録する。
- ・活動希望地域は「市内全域」「学校限定」の2種類から選択する。メールやファックスでの登録も可能である。
- ・登録と同時に、「ボランティア活動保険」に加入する。
- ・登録期間は1年とする。(複数年の活動を希望する場合も、1年ごとに登録)
- ・教育委員会が「学校支援ボランティア登録リスト」を作成し、各学校に配布する。

(2) 学校の活動

- ・教育委員会から配布された予算で、飲料品等を供し、お礼にかえる。
- ・校務分掌上に「学校支援ボランティア担当者」を位置付ける。
- ・学校支援ボランティア・コーディネーターの複数選出に努める。
- ・教職員とボランティア・コーディネーターの複線化を推進する。
- ・学校支援ボランティアの「校内交流会」を行う。(年2回程度)
- ・学校支援ボランティア実施報告書を作成し、年度末に教育委員会に提出する。

(3) 教育委員会の役割

- ・学校支援ボランティア活動推進委員会を設置し、活動の推進と充実を図る。
- ・各学校の学校支援ボランティア担当者及び学校支援ボランティア・コーディネーターを対象に、研修会を年3回実施する。
- ・学校間の情報交換、市内全域への学校支援ボランティア活動の啓発を目的として、年1回「学校支援ボランティア交流集会」を実施する。

4. 事業予算

- ・各学校一律10,000円
- ・保険料 1人当たり210円(活動中及びその行き帰りの保障)
- ・登録証印刷代(学校支援ボランティア登録証の印刷費)
- ・講師謝金等(ボランティア・コーディネーター研修会の講師謝金)

Ⅱ 導入に携わって

1. 経緯

平成9年の秋、木更津市教育委員会学校教育課の副主幹であった私は、当時の西村 堯^{にしむらたかし}教育長から「こんなものやってみたいがどうだろう。」との話をいただいた。「保護者や地域の人材がボランティアとして学校を支援する活動の推進」がその中身である。早速、当時の文部省に問い合わせしてみた。すると、そういうことなら世田谷ボランティア協会の興枙寛^{こうらきひろし}さん（現昭和女子大学特任教授）に相談するとよいと言われ、同協会の事務局がある三軒茶屋へと向かった。

興枙さんからは多くの貴重なアドバイスを頂戴した。例えば、ネットワークづくりはもちろん大切だが、それは緩やかなものであること、ネットワークの中心にはコーディネーターを据えてその育成に努めること、固定化した人材バンクは役に立たなくなるケースが多いので検討が必要などといったことである。世田谷ボランティア協会で学んだことはただちに教育長へ報告した。

報告を受けた教育長の感想を聞くうち、教育長が思い描いている内容と興枙さんのお話は大きな違いがわかり、改めて教育長の先見性や見識の高さに敬服したことを覚えている。このような経緯もあって、興枙さんには、その後平成13年8月25日（土）・26日（日）、かずさアカデミアホールを会場に「全国学校支援ボランティア・サミット in 木更津2001」を開催した際、記念講演の講師をお願いした。

2. 理念の継承

木更津市で学校支援ボランティア制度が発足した後、同じような事業は県内外でもスタートした。全国各地から多数の視察団や見学者が訪れた。しかし、全市的な規模で制度として20年以上も続いている自治体はそう多くない。なぜこれほど長期にわたって続いているのか。そのポイントを次に整理した。

- (1) 活動者の自発性と無償性を尊ぶ精神を大切にしていること。

ボランティア活動だからそれは当然だろうと思ってはいけない。受け手の側も、常にボランティアに対して敬意と感謝の念をもつことが大切である。このような意識啓発を、当時の教育長は教職員の会合や教育長だよりなどを通して繰り返し行ってきた。

- (2) 「家庭、地域社会、学校・行政によるトライアングル子育て運動」の理念が根底にあること。

保護者自らが家庭教育の主体であるという意識を持ちつつ、地域や学校をはじめとした様々なつながりの中で助け合いながら子どもたちの育ちを応援していくというのがトライアングル子育て運動の基本である。トライアングルという言葉には支援する側・される側といった一方通行ではなく協働による関係が大切という考えが込められている。このようなことから、学校支援ボランティアは「トライアングル子育て運動」を根底に据えている。

- (3) 誰もが自由にボランティア活動に参加できる緩やかな仕組みになっていること。

気を付けなければならないのは、ゆるやかな仕組みが、制度の「ゆるみ」や「ゆがみ」をもたらさないようにすることである。そのためには、学校や学校教育課の担当者はなるべくボランティア活動の現場に足を運ぶことが大切である。

このほか、人事異動で他市から転入してきた教職員にも、交流集会への参加などにより学校支援ボランティアの意義や役割を学ぶ機会を積極的に設けている点は特筆すべきであろう。また、学校支援ボランティアが制度として長続きしない自治体には、首長が替わると予算が減額されたり、教育長が替わると他の事業に重点が置かれ学校支援ボランティアが停滞したりするなどの傾向が見られる。その点、木更津市は、市長や教育長が替わろうと、学校支援ボランティア制度の理念と支援体制はこの間変わることなく継承されてきた。

3. 行政内部の支援

木更津市の場合、学校支援ボランティア活動事業を所掌しているのは教育委員会の学校教育課である。学校教育課には学校の教員出身者が多数いるが、市の教育行政を根底で支えているのは大勢の生え抜き職員であり、その下支えによって教員出身者の日常業務が成り立っている。予算折衝などで他の部局とのやりとりがうまく進まないとき助け船を出してくれるのは彼らである。市議会や教育委員会をはじめとするオール市役所の支援体制とそれに対する感謝の気持ちがあればこそ本事業は20年以上も続いているのである。

Ⅲ 改めて「意義」を考える

学校支援ボランティアの意義について、活動する側や活動を受ける側から考察するのが一般的だが、ここでは社会教育や住民自治そして発案者の視点などから考えてみる。

1. 社会教育の視点から

学校支援ボランティアが発足した当初、制度の推進に関する実務は、社会教育主事の資格を持ち、公民館や青少年教育施設などに勤務した経験のある学校教育課の指導主事が主に当たっていた。筆者も若い頃、勤務先の千葉県総合教育センターで社会教育主事の資格を取り、その後は当時の文部省生涯学習局で社会教育に係る政策立案などに携わった。阪神・淡路大震災後には局の関係者や研究者とともに渡渡しボランティア活動の現地調査に当たった。このときの経験や人とのつながりが、後に、木更津市で学校支援ボランティア活動事業の制度を設計したり図書¹⁾を出版したりする際に役立った。

このように、学校教育のみならず社会教育の現場経験を持つ教員が複数で事業の推進に携わったことが、結果として地域の教育力と学校教育の融合を目指す本事業を発展に導く要因の一つとなった。社会教育主事は、地域住民の学習活動の支援を通じて、人づくりや絆づくり・地域づく

りに中核的な役割を果たしてきたのである。

誰でもその気持ちさえあれば参加できる「開放性」、ボランティアへの敬意と感謝の気持ちを大切にする「パートナーシップ」、無理せず、楽しく、押しつけずで参加する「永続性」の3つは、学校支援ボランティアの基本だが、これは、地域活動に参画している成人を含め、すべての年齢層の人々を対象としている社会教育にも通じるものである。ボランティア自身の生きがいや成長を担っているという点において、学校支援ボランティア制度は社会教育の考えと軌を一にしており、学校支援ボランティアの原点もここにあると考える。

社会教育が制度化される以前は、学校の教員が地域の社会教育の役割を担っていた。そのため教員は地域のことをよく知っておりそれが学校教育にもプラスになっていたのだが、市町村に社会教育主事が置かれ公民館が整備されるようになると、皮肉なもので、いつしか教員は社会教育から遠ざかり学校は地域と疎遠になっていった。これは教員を教育指導に専念させるという点からすればプラスであったかもしれないが、結果として、学校と地域の間に垣根を作りいつの間にか学校をブラックボックス化させるという弊害をもたらすことになってしまった。そこに登場したのが「開かれた学校」づくりの考え方であり、その一翼を担ったのが学校支援ボランティアなのである。

一日の大半を、学校という閉ざされた空間で、自分よりはるかに年下の子どもたちと過ごす教員は、地域社会の大人と接する機会が少なく外部の人々や機関と連携することに消極的である。学校にクレームを寄せてくる一部保護者や住民などに対する警戒心の強さも関係するだろう。教員に学校外の人たちとのパートナーシップ意識を育ちにくくしているのは、このような学校及び学校を取り巻く独特の環境や風土が大きく影響しているのではないか。

今後、公民館職員専門性をアドバイザーという形で学校支援ボランティアの推進に生かされれば、学校教育だけでなく社会教育にも大きなメリットをもたらす可能性は大きくなると考える。

2. 住民自治の視点から

学校支援ボランティアは、教育はもちろん住民自治の活性化という面からも有効な事業で、それは次の法律の条項からも見てとれる。

(1) 教育基本法（第13条）

「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに相互の連携及び協力に努めるものとする。」

・学校は住民自治の原点であり、学校支援ボランティアは地域住民に自治の精神を育てる基礎づくりをも担っている。汗を流し、口を出すことによって「相互の連携及び協力」は成立するのではないか。汗をかかずに口だけ出しても共感者は得られまい。

(2) 地方自治法（第2条第14項）

「地方公共団体は、その事務を処理するに当っては、住民の福祉の増進に努めるとともに、

最少の経費で最大の効果を挙げるようにしなければならない。」

・開始から20年。この間累計1,500万円の予算で10万件に及ぶ活動を30以上の事業所で展開してきた。学校、家庭及び地域住民などの手によって、学校支援ボランティア事業は、最少の経費で最大の効果を挙げたと言える。

ボランティア活動は個人の自由意志に基づく行動であるが、学校支援ボランティアという他者と共感し合う場や機会を持つことによって、さらに地域社会の協同性をより強固にする力へ発展していくものとする。この点は、本学の建学の精神と相通するものがある。

3. 発案者の視点から

本制度の生みの親でもある西村元教育長は、その任期中、151号に及ぶ教育長だより「潮見の風」をインターネットで発信された。学校支援ボランティアについて触れたものだけでも十数号ある。次は、学校支援ボランティア制度が始まって5年目が終わろうとする平成15年2月に発行した教育長だより（第105号）からの抜粋である。

「さて、今、来年度へ向けての学校支援ボランティアの募集が始まっているが、ここで、もう一度、この活動の『原点』をみつめ、足元をしっかりと固めて、来年度へ臨みたいと思う。まず、第1に、しっかり確認しておきたいことは、私達が取り組んでいる、この活動の方向は決してまちがっていない、むしろ、時代の流れが強く求めている正しい方向であるということである。その証左の一つとして、全国から、本市のこの活動状況についての問い合わせがあり、多くの自治体職員、議会議員、教職員が視察に訪れている。また、一般紙をはじめ、教育関係紙誌にも好意的に紹介されている。活動を進めていく途中で、いくつかのトラブル、不都合、問題点が生ずるのは当然である。だからダメだと投げだすのではなく、『方向は正しいのだ。どうやって問題点を克服していくのか』という前向きな姿勢で進んでいきたい。アクションがあるからこそ、リアクション（反動、反作用）があるのだから、第2に確認したいことは、『原点』は、『家庭・地域社会・学校によるトライアングル子育て運動』にあるということである。学校は地域社会から支援を受けなければ、もはや、その機能は十分に発揮できないということである。特に、学校関係者に念を押ししておきたい。発足してから5年を経過し、人事異動で1/3程度の教職員が入れかわった。そこで、一部の教職員の中には、『めんどくさい』と受けとめているむきもないわけではない。あるいは、無償の労務提供者くらいに考えている人もいるようだ。とんでもない考え違いである。学校支援ボランティアは、あなたの教育活動の協力・協働者である。敬意と感謝の念を持って接遇し、そして、ボランティアの方々が増えることは、協力・協働者が増えること、あなたの味方が増えることだと受け止めていただきたい。（以下略）」

ここで強調されている敬意と感謝の念を持つことの大切さについて、その後も元教育長は繰り返し各種会合の場で学校教育関係者に訴えてきた。ボランティアに対し敬意と感謝の念を持つこ

とこそ学校支援ボランティアの意義だというのである。時には、「学校支援ボランティアを当たり前みたいに受けとっている校長や教師もかなりいる。学校支援ボランティアやコーディネーターに仕事を丸投げしないこと。学校が主導するのが『学校』支援ボランティアだ。」と警鐘を鳴らされる。自身も長いこと地域の学校で学校支援ボランティアに取り組みられているので、一連の言葉には重みがある。

4. 一人の校長として

筆者は直近の5年を東京都板橋区にある学園傘下の淑徳小学校で過ごした。校長として最も難しいと感じたのは、子どもたちに敬意や感謝の気持ちをどうはぐくむかという点であった。

淑徳小学校では希望者を対象に毎年夏休みを利用して海外体験旅行を実施している。淑徳小学校がここ数年お世話になっているデリンヤ小学校はメルボルンの南にあるフランクストン市に位置し、全校児童が約800名の公立小学校である。筆者も在任中に2回訪問する機会を得た。教育目標には、友好 (friendship)、責任 (responsibility)、敬意 (respect)、誠実 (integrity)、ユーモア (humour)、楽観 (optimism)、快活 (resilience) が掲げられ、学校挙げてこの実現に取り組んでいる。

滞在中、何度かデリンヤ小学校の校長と意見交換をした。7つの価値の中で子どもたちに最も必要、それでいて実現の難しいものは何か尋ねた。同校で18年校長を務めるジェニー先生は、即座に「敬意 (respect)」だとお答えになった。筆者も校長経験は10年以上あるので彼女の言葉には共感を覚えた。子どもと子ども、子どもと教師 (大人)、教師と保護者、教師と教師、これら関係づくりにおいて敬意ほど大切なものはなく、それでいて敬意ほど身に付けることが難しい価値はないというのである。

デリンヤ小学校では全校集会を大切に子どもたちに対する称揚や称賛の場を必ず設けている。同校では、保護者や地域住民による学校支援ボランティア活動は日常的に行われ保護者や市民に対する敬意や感謝の意識付けは学校生活のあらゆる場において具現されていた。以前は心理学の研究者やカウンセラーなどを招きレジリエンスに関する校内研修に積極的に取り組んでいたという。その積み重ねが学校や子どもたちに快活で落ち着いた雰囲気をもたらしているのだろう。学校の良し悪しは、結局のところ、リーダーである校長次第という思いを強くした。

改めていま必要なことは、学校支援ボランティアの意義の再確認である。前述した3つの視点をもとに、木更津市における学校支援ボランティアの意義に対する普遍性や妥当性について認識を一層深めるべきと考える。

おわりに

学校と教育委員会は対等ではないが、学校教育を充実させるという意味において学校支援ボラ

ンティアと教員は対等でありお互い大切なパートナーである。学校支援ボランティアにやる気をもたらすのは校長の役目であるが、ボランティアやコーディネーターとすれ違って挨拶一つしない校長がいると聞く。それではパートナーもパートナーであることに嫌気をさしてしまう。感謝の気持ちを持つことを改めて大切にしたい。

淑徳小学校では宗教行事をはじめとする建学教育は無論大切にしたがそれだけで敬意や感謝が身に付くものではない。ボランティアの活動を目の当たりにしたり、ボランティアの方々と一緒に話をしたりすることによって教員が地域の方々に感謝の念を抱き、それが子どもたちの心にも次第に伝っていくという図式がここでは描けない。教育支援や環境美化は業者や派遣会社によってすべてまかなわれ、ボランティアの手にゆだねるものがないのである。学校支援ボランティアとともに過ごした公立学校の経験が生かせず、恵まれた物的環境は最後まで私を悩ませた。

そこで、校内における自主活動を教職員一人一人に奨励した。次は、玄関前花いっぱい運動に取り組んだ男性教員の感想である。

「校門前から昇降口にかけての通路に花のプランターを置いたことによって、人と人との間に会話が生まれたり、花に気づいた人が積極的に手入れをしてくれたりなど、花の栽培をきっかけに人と人とのつながりが生まれた。」

また、女性トイレ（来客・職員用）の美化に取り組んだ女性教員は次のように述べている。

「女性トイレ・流しの美化活動としてポスター掲示と定期的な点検を行った。ポスターを掲示することで、清潔に保つ意識をもつと同時に、清掃業者の方への感謝の気持ちをもつことができた。また、ポスター掲示による意識の向上に加え、定期的な点検を行ったことで、目立つ汚れが少なくなった。」

子どもたちに敬意や感謝の気持ちをはぐくむ第一歩は教員からという発想に基づくこの実践は、効果はともかく「トゥギャザー・ウイズ・ヒム」を教員が自分自身の問題としてとらえる第一歩になったのではないか。ボランティア活動やボランティア学習をいかに個々人に定着させるかは教育上の大きな課題である。

本学園では令和元年度・2年度と「建学の精神」に関わる教職員特別研修会を開催している。討論会の実施もさることながら、「共生」には人々に感謝の気持ちを持つという思想があることを各部門でどう実践しているか、実際に見学し合う場も必要であろう。

【付記】

本稿の作成に当たっては、木更津市教育委員会及び淑徳小学校並びに元木更津市教育長 西村堯氏をはじめとする関係の方々に多大なご協力をいただいた。記してお礼申し上げます。

【注】

1) 明石要一・金子馨編『それいけ！学校支援ボランティア』明治図書出版、1999年。

明石要一・金子馨・多田元樹・千葉県木更津市立教育センター編著『学校支援ボランティア“する側”の心得帳』明治図書出版, 2002年.

【参考資料】

長谷川匡俊 (2016) 『淑徳人へのことば —共生と実学の気風—』淑徳大学 長谷川仏教文化研究所.

長谷川匡俊 (2020) 『普賢菩薩の十大願 —中興・謙誉良信上人五十回忌に寄せて—』白鷗社.

長谷川匡俊 (2020) 『念仏僧の珠玉の言葉から —「学問之碑」に先達の声を聞く—』白鷗社.

木更津市学校支援ボランティア活動推進委員会, 木更津市教育委員会 (2017) 『平成29年度 第14回木更津市学校支援ボランティア交流集会 実施報告書』.

西村 堯 (2004) 『教育長だより 潮見の風』(私家版), アドメイクス.

淑徳小学校 (2019) 『平成30年度 研修集録 なでしこ ~建学の精神具現に向けて~』4.

淑徳小学校 (2019) 『Meet the World —小学生の海外ホームステイのための指導ハンドブック—』.

多田元樹 (2009) 「地域住民の学校支援活動による新たなコミュニティづくり ~木更津市の学校支援ボランティア制度を例に~」『日本ボランティア学習協会研究紀要 ボランティア学習研究』(日本ボランティア学習協会) 10, 90~91.

多田元樹 (2013) 「木更津の学校支援ボランティアはなぜ長寿なのか」『社会教育』(財団法人 日本青年館) 5月号, 27~37.